論文の内容の要旨

論文題目　　言語態分析
　　――コミュニケーション的思考の転換

氏名　　原　宏之

言語態分析は、英訳で＜Praxis of Language＞とされる「言語態」の分析である。今日の言語態の実践は、自然言語による書字や口話にとどまらず、映像や音声による表現を含み、メディアもコンピュータによるインターネット、放送テレビ、映画、CD など、電子／電気／光学の機器に拡大されている。このような新たなメディア・テクノロジーの実践を、現代の「言語態」と捉えて、包括的に分析する方法論が必要である。実践をアーカイヴとして記録した後に、この記録を分析することは、一種のメタ実践であり、文字通りのアナリシスである。だが、言語態分析にとり基盤となるのは、ミシェル・フーコーがディスクール分析（知の考古学）で前提とした「アーカイヴ」の発想なのである。ある種の全体性が、特定のテーマについての言語態（言説編成の集合）となり、その集合の要素となる各発話の分析と、全体としての言語態の分析を、理論的に橋渡しする必要がある。

本論文の真の目的は、これからの歴史学にとって、映像や音声の史料を扱うにはどうしたらよいかと道標を示し、またぜひともそれらマルチモーダルな情報を取り込むべきだと提唱することにある。この目的のために、まずは発話の分析としてエミール・バンヴェニストの言語理論からはじまり、語用論や発話の言語学に発展してゆく系譜、またその近くに属しながらもフーコーの「ディスクール」概念をつねに意識していたドミニック・マングノーの「ディスクール分析」などの知見を借りた（スピーチ・アクトの問題とアーカイヴの問題）。そこから論理学（真偽の問題）と詩学（リズムの問題）に発想を借り、会話分析や相互行為論などことばと対人間のインタラクションに関するあらゆる知見を再検討しながらことばの問題を設定し、その上で映画研究などから映像分析の方法を借りて、テレビや雑誌など情報のマルチモダリティを分析する初歩を確立し、さらに都市の語りやナショナリズムの言説について、「創始のディスクール」（E.ヴェロン）を特定する方法の有効性を例示した。

１．［コミュニケーションを情報伝達と考えることの不十分さについて］

わたしたちが相手にするコミュニケーションは、自然界の現象ではなくて、「社会」を構成する営みに限定したものである。そこでのコミュニケーションはまず主体による他なる主体に対する己の承認の要求として現れる。B による A の生存の承認は C の証言を通して成立する。この第三項の必要性から、社会は政体や経済、共同体などあらゆるレベルに複雑化してゆく。テクノロジーの介入によりメディア・コミュニケーションと、＜交通＞（移動）の拡大の登場により、コミュニケーションは対人間のインタラクションにとどまらず、社会を構成するネットワークそのものになっている。

そこに現れる、諸行為としてのコミュニケーションの軌跡（痕跡）を＜言語態＞と呼ぶことができる。そして言語態の特定の瞬間の「かたち」をアーカイヴとして分析することから、段階的（系譜学的）な歴史研究を行うことができる。これが本論文で述べる言語態分析である。

２．［発話行為と発話内容］

１．で触れたコミュニケーション行為を、わたしたちは方法論的に、発話行為／発話内容の二層から捉える。前者は、「そのものが話すときの歴史的出来事としての行為」であり、後者はそうした発話行為から「観察される諸現象の総体（テクスト）」である。

本論文で用いた「ディスクール」の語はフーコーによるものとほぼ同義で、発話内容相互の内的連関・秩序・序列・調整により形成されるものであるが、これを１．で述べた＜特定の瞬間のかたち＞（資料）として扱う決定要素は、第一に時間（歴史的時間）であり、第二にテーマ（共有されるトピックがいかに効果として後に力を残すか）である。

発話から言語態へと分析のレベルを上げるときに問題となるのは、現代社会のコミュニケーションは言語だけではなく、映像や音声によるものも重要であるのに、これらの分析法が確立されていないことである。この橋架のために、本論文では非言語コミュニケーションの分析の先行研究のうち、とくにゴフマンの対面的な相互行為の分析から考えはじめることにした。たとえば公共の場での身体関与（ツメを噛むなど）が、いかにタブーとなり、どのように場への他の参加メンバーに影響を与え、この他者たちをつぎなる相互行為へとうながすか、などの初歩的な現象から考察をはじめた。

相互行為の分析に、会話分析を応用して会話とジェスチャー、視線などを記述することは簡単である。だが発話は、それだけの問題に還元されるものでもない。たとえばダイクシスの問いがある。「のどが渇いた」（数分）／「彼女は重病だ」（数週間）というように、発話そのものに内在する時間性がある。また、本論文では「ネオリベラリズム」について素描し、「ネオナショナリズム」について分析したように、＜ことばの効果＞の問題には、それが＜発せられるタイミング＞が重要である。なぜならば、その発話はどれか他の発話（群）に向けてつねに行われているからであり、このことは論壇や報道、政治演説などに顕著である。だから本論文では、言語態内における発話相互の関係をはかるために、初歩的な論理学の知見に頼り、タイミングだけではなく、ことばと事実の整合性がとりわけ事後的には影響力に関与することを明らかにした。

３．［分析１：証言映画／政治バラエティ］

会話分析と論理分析を中心に、太平洋戦争南方戦線での終戦後の部下銃殺の有無をめぐる証言映画である『ゆきゆきて、神軍』を分析した。この映画では、関与した元兵士たちのところを巡り証言を積み重ねてゆくことで、前の証言の嘘や語らずにいられたことが明らかになり、そこからまたつぎの証人へと、論証が試みられてゆく。ここで重要なのは都合の悪い話題が出たり、嘘をついたりするときの証言者たちの心理が、「視線」や「言いよどみ」などから露呈していることである。

また同様の試みを政治バラエティ番組『TV タックル』でも行った。ここでは司会者、コメンテーター、政治家などの間で、明瞭な「役割分担」があること、テロップや会話の組み立て、あらゆるモンタージュから「与党ｖｓ野党」の構図が立てられていることなどを明らかにした。

４．［分析２：ネオナショナリズム］

本論文では、突出した発話群にはその突起部分を削ぐような発話があり、そうしてバランスのとれた状態であることが、自然のリズムであるとしている。それにも拘わらず、ひとつの言語態内部である一定の偏向した言説編成が生じることもある。ここではネオナショナリズムを題材に、その偏向の理由を「創始のディスクール」にはじまる「偽の系譜」の確立に求めた。

２００６年北朝鮮の核実験により、発足まもない安部内閣の周囲で「日本の核武装」が話題にのぼるようになり、集団的自衛権は既定路線、集団安全保障は湾岸戦争以降の既定事実という、憲法の原則から見れば異常と思われる言語態が違和感なく受けいれられるようになっている。少なくとも２０００年の段階では森首相の「神の国」発言が問題視される時代をわたしたちは生きていた。だが、その後の政治変化というよりも、１９９６年の「新しい歴史教科書をつくる会」周辺のディスクールこそが「創始のディスクール」であり、これが政界内外で学問界や経済界もとりこみながらいかに広範な影響を与えたのか、なぜそれが自然化されたのかを検証した。

５．［分析３：小泉元首相の言語態］

まず言語と映像がどのように異なるのかを整理した。方法的に、小説や新聞記事の自然言語を映像に変換するとどうなるのか（破綻する）を見ながら、言語特有の「イメージ構成」を明らかにした。

その上で、小泉元首相の在任前期の言語態を分析した。写真集などイメージを多様したPR戦略、とりわけ読むよりも眺めるメディア（週刊誌ならより大衆詩にPRを絞り込む）中心のPRにより人気を博した。演説や答弁を見ると、論理的な説得力に欠くことが多い。たとえば、「フセイン大統領は見つかっていない」、「それだからといってフセイン大統領が存在していなかったといえるのか」、「いえないでしょう」という類の贋の論証である。

これらの問題をイメージによるスピーチ・アクトと位置づけて分析した。

本論文は、やや冗長ではあるものの、筋はごく簡潔なことであり、それは以下のとおりである。

（１）マルチモダリティの取り込み
（２）発話レベルの分析と言説レベルの分析の接合
（３）その総合としての言語態分析の提案

ひとりの研究者がこれら全般的な問題を扱うには限界がある。そのことは理論的な面、つまり方法論的の提唱の部分にもいえることで、より多分野の研究者の参加が待たれる。

また具体的な分析例は、恣意的な選択にもとづくものであり、例の数も豊富とはいいがたい。

つまり本論文の目的は、今後「言語態分析」がどのように発展してゆく可能性があるのか道標を立てて、より多数者の参加により追加や変更、修正をまじえながら、豊富な量の分析例を求める、そのようなひとつの契機をつくることにある。

そのために慎重に話題を選択し、ごく基本的な部分を、とりわけフランスでの動向など、一般的に馴染みのない点を強調しながら、論文としてまとめたものである。